

【研究ノート】

## 江上八院の戦い（慶長5年10月20日）における鍋島家の頸帳に関する考察（その2）

白 峰 旬

### 【要 旨】

本稿は、慶長5年（1600）10月20日に立花家の軍勢と鍋島家・龍造寺家の軍勢が対戦した江上八院の戦い（江上合戦）において、鍋島家側が作成した頸帳（首帳）の内容について考察した。さらに、鍋島家先手の兵科別編成、この戦いにおける戦闘の具体的状況、『佐賀藩諸家差出戦功書』における記載内容についても論及した。

さらに追記では、江上八院の戦い関係の書状として、これまで関係書籍でよく引用されてきた「（慶長五年）十月廿日付吉村橘左衛門尉宛鍋島直茂書状」において、戦場地名を示す「八郎院」という記載は、「八郎院」ではなく「八之院」が正しいことを指摘した。

### 【キーワード】

江上八院の戦い、頸帳（首帳）、『佐賀県近世史料』、『佐賀藩諸家差出戦功書』、八之院

※拙稿「江上八院の戦い（慶長5年10月20日）における鍋島家の頸帳に関する考察（その1）」（『別府大学紀要』60号、別府大学会、2019年）より続く。

表1  
「鍋嶋七左衛門組頭<sup>(ママ)</sup>（頸カ）帳」<sup>(注1)</sup>、「柳川陣頸帳」<sup>(注2)</sup>

頸 数	番号	名 前	組 など	備 考 <sup>(注3)</sup>
頭（頸カ）2	1番	赤司権兵衛		頭→頸（以下同じ）、頸数の数字のあとに「ツ」の記載あり（以下同じ）
頭（頸カ）1	2番	野口長左衛門		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 4番	秀嶋彌吉		彌吉→弥吉
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 3番	同子助七郎		
頭（頸カ）1	5番	大坪佐吉		佐吉→佐吉
頭（頸カ）2	6番	江副小三		
頭（頸カ）1	7番	大嶋源左衛門		
頭（頸カ）1	8番	伊藤彦兵衛		伊藤→伊東
頭（頸カ）1	9番	馬場久七郎		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 11番	馬郡与左衛門		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 10番	石田蔵人		
頭（頸カ）1	12番	今村与右衛門		
頭（頸カ）1	13番	嶋千右衛門		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 15番	中野茂右衛門		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 14番	中野六内		中野→同
頭（頸カ）1	16番	伊藤善助		伊藤→伊東
頭（頸カ）2	17番	杉町少蔵		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 19番	同新右衛門		
頭（頸カ）2	<sup>(ママ)</sup> 18番	同四助		
頭（頸カ）1	20番	同彌九郎		彌九郎→弥九郎
頭（頸カ）1	21番	川副利兵衛		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 23番	赤司伊兵衛		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 22番	古川次郎七		
頭（頸カ）1	24番	同撰津守		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 26番	中山掃部		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 25番	同式部		
頭（頸カ）1	27番	留須右衛門尉		留須右衛門尉→留次右衛門
頭（頸カ）1	29番	倉町平作		
頭（頸カ）1	<sup>(ママ)</sup> 28番	松田権助		権助→権内
頭（頸カ）2	30番	松田源右衛門 <sup>(注4)</sup>	秀嶋源兵衛組	秀嶋源兵衛組→記載なし
頭（頸カ）2	31番	小川四郎次	秀嶋源兵衛組	秀嶋源兵衛組→記載なし
頭（頸カ）1	32番	中原惣左衛門	同人組	同人組→記載なし
頭（頸カ）1	33番	山下平助	同人組	同人組→記載なし
頭（頸カ）1		百武善内	同人組	同人組→記載なし
頭（頸カ）1		香田三蔵	同人組	同人組→記載なし
頭（頸カ）1		田崎孫右衛門	同人組	同人組→記載なし、田崎→田崎

頭数	番号	名前	組など	備考 <sup>(注3)</sup>
頭(頸カ) 1		伊香々五郎次郎		伊香々→伊香賀
頭(頸カ) 1		杉町次助		次助→次介
頭(頸カ) 1		石井久次郎	相浦三兵衛組	相浦三兵衛組→記載なし
頭(頸カ) 1		塩塚三九郎	相浦三兵衛組	相浦三兵衛組→記載なし
頭(頸カ) 1		古川彦作	同人組	同人組→記載なし
頭(頸カ) 1		小副川彦右衛門	同人組	同人組→記載なし
頭(頸カ) 1		小池惣五郎	同人組	同人組→記載なし
頭(頸カ) 1		仁江田五兵衛	同人組	同人組→記載なし、五兵衛→又兵衛
頭(頸カ) 1		牛嶋兵部	牛嶋監物組	牛嶋監物組→記載なし
頭(頸カ) 1		牛嶋甚助	牛嶋監物組	牛嶋監物組→記載なし、甚助→甚介
頭(頸カ) 1		同助七郎	同人組	同人組→記載なし、助七郎→介七郎
頭(頸カ) 1		同久蔵	同人組	同人組→記載なし、久蔵→休蔵
頭(頸カ) 1		同彌作	同人組	同人組→記載なし、彌作→弥作
頭(頸カ) 1		同新九郎	同人組	同人組→記載なし
頭(頸カ) 1		石丸勘次郎	同人組	同人組→記載なし
頭(頸カ) 1		泉惣四郎	同人組	同人組→記載なし
頭(頸カ) 1		同六助		六助→六介
頭(頸カ) 1		石丸九左衛門		
頭(頸カ) 1		武富兵右衛門		
頭(頸カ) 1		立川主馬允		主馬允→主馬丞
頭(頸カ) 1		立川孫三郎		
頭(頸カ) 1		同久六		久六→久六郎
頭(頸カ) 1		杉町又兵衛		
頭(頸カ) 1		杉町新五郎		新五郎→新九郎
頭(頸カ) 3		牛嶋監物		
頭(頸カ) 3		野村重助内 <sup>(注5)</sup>		
頭(頸カ) 1		石井清五左内		
頭(頸カ) 1		重松善左内		
頭(頸カ) 3		留主五郎右衛門内		
頭(頸カ) 3		馬場九左衛門内		
頭(頸カ) 1		杉町新右衛門内		
頭(頸カ) 2		倉町半三郎内		
頭(頸カ) 13		鍋(「嶋」脱カ)七左衛門内		
頭(頸カ) 1		上野三郎四郎		
頭(頸カ) 2		堤主水	昇差	昇差→昇さし
頭(頸カ) 2		江里口清左衛門		
頭(頸カ) 1		中牟田清左衛門		
頭(頸カ) 1		赤司十郎		十郎→十良
合計頭数103				

- (注1) 「鍋嶋七左衛門組頭<sup>(ママ)</sup>(頸カ)帳」(「舊記」、『佐賀県近世史料』1編1巻、佐賀県立図書館、1993年、807～808頁)。
- (注2) 「柳川陣頸帳」(「佐賀藩諸家差出戦功書」、『佐賀県史料集成』古文書編、29巻、佐賀県立図書館、1988年、234～237頁)は、前掲「鍋嶋七左衛門組頭<sup>(ママ)</sup>(頸カ)帳」とほぼ同内容である。「柳川陣頸帳」は、馬渡氏の戦功書の中に含まれているが、どうして馬渡氏の戦功書の中に含まれているのか、という理由は不明である。ちなみに、「柳川陣頸帳」に馬渡氏の名前はないが、江上八院の戦いで馬渡三右衛門は鍋島茂忠(先手〔前方])の組付として敵と戦い、一番鐘の戦功があった(表6参照)。よって、馬渡三右衛門が鍋島茂忠(七左衛門)に属して戦ったことと関係するのかも知れない。
- (注3) 「備考」欄では、前掲「柳川陣頸帳」の記載が異なる箇所について、それぞれ注記した。
- (注4) 松田源右衛門については、その戦功書に「柳川(の合戦)においても敵2人を討ち取った。その首帳が今も残っている」(筆者〔白峰〕が現代語訳をおこなった)と記されている(「佐賀藩諸家差出戦功書」、『佐賀県史料集成』古文書編、29巻、佐賀県立図書館、1988年、147頁)。この「敵2人を討ち取った」という記載と、上表における「頭(頸カ)2」の記載は数として一致する。また、「その首帳が今に残っている」という記載における首帳とは、上表の頸帳を指すと考えられる。
- (注5) 以下の「〇〇内」という記載は、それぞれ麾下の武士や中間などを含めた手組として討ち取った敵の頸の数の合計という意味と考えられる。
- (注6) 前掲「柳川陣頸帳」の末尾には「慶長五年十月廿日 右之通御坐候、以上、」という記載がある。この記載は、前掲「鍋嶋七左衛門組頭<sup>(ママ)</sup>(頸カ)帳」には記されていない。

※上表において、(討ち取った敵の)頸数の合計が103ということは、敵である立花家家臣の戦死者数は100人以上であったことがわかる。

表2  
鍋島家軍勢の備十二段（「直茂公譜考補十」<sup>(注1)</sup>）

御勢3万余騎、備十二段で慶長5年10月14日に佐賀を出立した。鍋島直茂も鍋島勝茂と同じく出馬した。	
先陣	鍋島茂里（平五郎）、その先は鍋島茂忠（七左衛門） <sup>(注2)</sup>
二陣	後藤茂綱（左衛門太 <sup>(ママ)</sup> 〔大カ〕夫）
三陣	須古信昭（市兵衛）
四陣	諫早家晴（七郎左衛門）、同直孝（右近允）
五陣	多久家久（与兵衛）
六陣	鍋島勝茂の旗本 <sup>(注3)</sup>
七、八の両陣	（勝茂の陣の）左右に分ける <sup>(注4)</sup>
九陣	鍋島直茂
十、十一の両陣	（直茂の陣の）左右に分ける <sup>(注5)</sup>
十二陣	殿 <sup>(しんがり)</sup> は御馬廻、そのほか物頭の面々…小川直房（半助）、馬場茂員（清兵衛）、千葉胤信（忠右衛門）、神代家良（六兵衛）、内田茂堅（弥右衛門）、成富茂安（十右衛門）、出雲茂通（兵部少輔）、犬塚茂虎（三郎右衛門）、鍋島道泉（生三）、倉町家秀（半三郎）、鍋島種巻（新左衛門）、久納茂俊（市右衛門）、田尻房種（平次郎）をはじめとして、小城、佐賀、蓮池、城原、藤津の士卒 <sup>(注6)</sup>
御留守	鍋島房茂（豊前守）

一説に、竜<sup>(ママ)</sup>（龍カ）造寺安順は四陣。

一説に、鍋島生三は御備の九段目（＝鍋島直茂の陣）にいた。

一説に、10月15日に佐賀を出馬、同月19日の晩に先陣が筑後大善寺（現福岡県久留米市大善寺町宮本）へ着いた。

（注1）「直茂公譜考補十」（『佐賀県近世史料』1編1巻、佐賀県立図書館、1993年、794頁）。

（注2）先陣（先手）において、鍋島茂忠が前方、鍋島茂里が後方に布陣したことがわかる。「直茂公譜考補十」の布陣図（前掲『佐賀県近世史料』1編1巻、798～799頁。本稿の図1）でもそのように描かれている。

（注3）「直茂公譜考補十」の布陣図（前掲『佐賀県近世史料』1編1巻、798～799頁。本稿の図1）では、「六」（＝六陣）の「勝茂公」を「本陣」としている。

（注4）「直茂公譜考補十」の布陣図（前掲『佐賀県近世史料』1編1巻、798～799頁。）では、「七」（＝七陣）、「八」（＝八陣）を「六」（＝六陣）の「勝茂公」の「本陣」の「脇」（＝脇備）としている。

（注5）「直茂公譜考補十」の布陣図（前掲『佐賀県近世史料』1編1巻、798～799頁。本稿の図1）では、「十」（＝十陣）、「十一」（＝十一陣）を「九」（＝九陣）の「直茂公」の「脇」（＝脇備）としている。

（注6）「直茂公譜考補十」の布陣図（前掲『佐賀県近世史料』1編1巻、798～799頁。本稿の図1）では、「十二」（＝十二陣）の「殿」（しんがり）は「各物頭」としている。

表3  
須古信昭の家来で分捕った者<sup>(注1)</sup>

敵を鉄炮にて打ち伏せて首取 <sup>(注2)</sup>	川棚善右衛門
首取	西岡次右衛門
首取	西山橋左衛門
首取	黒川忠右衛門
首取	緒方左助
首取	福嶋権兵衛
首取	吉木孫右衛門
首取	喜多長助
首取	堀江判十郎
首取	太曲孫十郎
首取	原田仁兵衛
首取	嶽勘左衛門
首取	三重勘右衛門
鉄炮にて打捨	香田近右衛門
鉄炮にて打捨	原四郎兵衛
鉄炮にて打捨	堀江左右助
鉄炮にて打捨	笠原神兵衛
鉄炮にて打捨	永代源之允
鉄炮にて打捨	西山土(五)左衛門
鉄炮にて打捨	江湖次郎左衛門
弓にて射捨	植崎嘉助
弓にて射捨	川尻甚吉
弓にて射捨	白川與四之允
切捨一人、鉄炮射捨一人 <sup>(注3)</sup>	清水源右衛門
討捨	山領五兵衛
討捨	田中平兵衛
討捨	蒲原清右衛門
討捨	堀江勘兵衛
討捨	福田兵左衛門
馬上にて市兵衛(=須古信昭)の備場を駆け出し、敵陣へ駆け入り、長刀にて敵七人を討ち取り、討死をした <sup>(注4)</sup>	池田判兵衛
(池田)判兵衛と申し合わせて敵陣へ駆け入り、鎗にて敵三人を突き殺し、討死をした <sup>(注4)</sup>	吉永勘之允

(注1) 「須古信昭家来分捕ノ者」(「須古戦功記」、『佐賀県近世史料』1編1巻、佐賀県立図書館、1993年、811～812頁)。須古信昭は鍋島家軍勢の編成では三陣である(表2、図1参照)。

(注2) 敵を鉄炮で打ち伏せて敵の首を取ったケースもあったことがわかる。

(注3) 「一人」という表記になっているので、首は取らずにそのまま放置したという意味と考えられる。ただし、ここだけ人数の表記がある理由はよくわからない(それ以前の「打捨」や「射捨」の表記のところには人数の表記はない)。あえて理由を考えれば、「切捨」と「鉄炮射捨」の複数の種類があるため、ここだけ人数を表記した可能性もある。

(注4) 敵陣に突入して敵を討ち取ったが討死した者の名前も特記している点は注目される。

表4 「高麗陣成富茂安組着到」(天正二十一年三月五日)<sup>(註1)</sup>

No.	名 前	石 役	主 従	鉄 炮	鎗	弓	半 弓	の ぼ り	外 夫	被 官	そ の 他
1	蔵町三郎	2250石役	53人	10挺	5本		5張	1本	14人		
2	犬塚三郎右衛門尉	1510石役	48人	8挺	8本		5張	2本	19人		
3	出雲藤右衛門尉・同作蔵	1200石役	46人	7挺	4本	3張	2張	3本	21人		
4	鴨打彦六	1000石役	24人	4挺	2本			1本	10人		
5	空閑善右衛門尉	800石役	10人	2挺					1人		
6	鴨打清兵衛	400石役	11人	1挺		2張			3人		
7	鴨打孫右衛門尉	※記載脱カ	8人	1挺					3人		直鉄炮2挺
8	前田久右衛門尉	320石役	9人	1挺	1本				4人		
9	龍三郎左衛門尉	※記載脱カ	6人			1張			2人		
10	徳嶋四郎右衛門尉	140石役	10人	1挺	2本				3人		
11	木塚五郎兵衛	180石役	4人		1本				2人		
12	持永助左衛門尉	155石役	23人	2挺	4本	1張			8人		長刀1振
13	中野監物丞	140石役	11人	2挺	2本	1張	3張		12人 <sup>(註2)</sup>		長刀1振、のぼりさし7人 <sup>(註3)</sup> 、此夫3人
14	草野太郎	280石役	11人	2挺	2本				7人		
15	藤山四郎左衛門尉	90石役	4人	1挺					3人		
16	納富六郎左衛門尉	90石役	4人	1挺					3人		
17	弓鉄炮衆 <sup>(註4)</sup>	※記載脱カ	22人	10挺 <sup>(註5)</sup>		5張			11人		
18	百武平左衛門尉	70石役	5人	1挺	1本		1張		3人		
19	弓衆 <sup>(註6)</sup>	※記載脱カ	7人			3張			1人		
20	石丸仙右衛門尉	60石役	5人	1挺	1本				3人		
21	徳島太郎三代	138石役					1張		2人	4人	
22	鉄炮衆 <sup>(註7)</sup>	※記載脱カ	24人	19挺 <sup>(註8)</sup>					12人		
23	井本茂七	120石役	5人	1挺					2人		

No.	名前	石役	主従	鉄炮	鎗	弓	半弓	のぼり	外夫	被官	その他
24	平河相右衛門尉	55石役	4人	1挺					2人		
25	満武与三左衛門尉	50石役	2人		1本				2人		
26	小河三郎右衛門尉	40石役	3人						1人		
27	深町吉左衛門尉	35石役	3人								
28	田中右馬允	25石役	3人		1本				1人		
29	久布白清右衛門尉	100石役	5人		1本				3人		
30	五郎河助作	40石役	4人	1挺					1人		
31	中嶋知右衛門尉	40石役	3人						1人		
32	古賀宗可	40石役	3人		1本				2人		
33	河波作右衛門尉	37石役	3人						2人		
34	服部孫右衛門尉	30石役	3人						1人		
35	岩村小右衛門尉	30石役	5人		1本				3人		
36	高木平左衛門尉	40石役	3人						1人		
37	平井与一郎	40石役	3人								
38	木塚善左衛門尉	30石役	2人						1人		
39	久賀与左衛門尉	40石役	2人						1人		
40	藤崎半七郎	25石役	4人		1本				2人		
41	大江三十郎	35石役	4人						1人		
42	堤惣兵衛	30石役	4人						1人		
43	梅福軒	20石役	2人					1張	1人		
44	小柳久四郎	20石役	2人						1人		
45	大場与作	40石役	3人					1張	1人		
46	服部新左衛門尉	20石役	3人								
47	藤瀬清十郎	※記載脱カ	3人								
48	山傾五郎三郎	25石役	3人						1人		
49	横田善五郎	20石役	2人						1人		
50	仁戸田新右衛門尉	20石役	3人						1人		



No.	名前	石役	主従	鉄炮	鎗	弓	半弓	のぼり	外夫	被官	その他
51	平尾孫作	35石役	3人				1張				
52	同与兵衛	※記載脱カ	2人								
53	同又右衛門尉	※記載脱カ	2人								
54	同源右衛門尉	※記載脱カ									
55	同兵部少	※記載脱カ	2人								
56	平嶋又二郎	※記載脱カ	2人								
57	東彦三郎	※記載脱カ	2人						1人		
58	中尾三次郎	25石役	2人						1人		
59	猪隈七藏	※記載脱カ	4人		1本				1人		
60	成富善藏	30石役	3人						1人		
61	於保左馬允	※記載脱カ	2人				1張				
62	平尾新三郎	※記載脱カ	2人								
63	成富五郎次郎	※記載脱カ									夫1人
64	中嶋平八	※記載脱カ	2人						1人		
65	土橋善兵衛	※記載脱カ	2人						1人		
66	赤司久助	※記載脱カ	2人						1人		
67	河崎太郎左衛門尉	20石役	2人						1人		
68	志波平介	※記載脱カ	2人						1人		
69	萩原孫三郎	※記載脱カ	2人								
70	安住清藏	※記載脱カ	4人						1人		
71	堤善八郎	※記載脱カ	2人						1人		
72	石田与九郎	25石役	3人						1人		
73	志波藤介	40石役	4人	1挺					3人		
74	成富源十郎	25石役	3人						1人		
75	藤山助太	※記載脱カ	3人		1本				1人		
76	遠藤助右衛門尉	※記載脱カ	4人						1人		
77	成富助五郎	※記載脱カ	2人						1人		

No.	名 前	石 役	主 従	鉄 炮	鎧	弓	半 弓	の ぼ り	外 夫	被 官	そ の 他
78	土山小二郎	※記載脱カ	2人						1人		
79	田河家益	※記載脱カ	2人						1人		
80	土橋覚圓	※記載脱カ	2人						1人		
81	岩松新太郎	※記載脱カ	2人						1人		
82	江口源右衛門尉	※記載脱カ	2人						1人		
83	高木玉菊代	70石役	3人						1人		
84	同兵部太代	※記載脱カ									夫1人
85	橋本善千世代	※記載脱カ									1人
86	龍万千よ代	30石役									1人
87	田中愛軍代	※記載脱カ									1人
88	伊香か(賀)三七郎	※記載脱カ	2人						1人		
89	仁戸田与右衛門代	※記載脱カ									1人
90	柿原善介	※記載脱カ									
91	岩松孫七郎	※記載脱カ									
92	石田甚吉	※記載脱カ									夫1人
93	下村神三郎(異筆)	※記載脱カ									
94	萩原兵太	※記載脱カ									夫1人
95	成富拾右衛門尉	800石役		11挺	11本	12張				85人	夫54人、在大坂、半役
96	下村神三郎	※記載脱カ		1挺							
合計 882人 <small>(注9)</small>											
(そのうち) 兵617人 <small>(注10)</small>											
(そのうち) 鉄炮95挺 <small>(注11)</small>											
(そのうち) 弓49(半弓を加える)(張脱カ) <small>(注12)</small>											
(そのうち) 鎧53本 <small>(注13)</small>											
(そのうち) のぼり15本 <small>(注14)</small>											
天正21年 3月5日 成富十右衛門尉(花押)											

※上表におけるNo.は作表にあたり補足した。

※「石役」について記載がない場合は「※記載脱カ」とした。

(注1) 「高麗陣成富茂安組着到」(天正二十一年三月五日) (『鍋島家資料目録』、佐賀県立博物館、1984年、89～95頁)。

(注2) その内、手男4人。

(注3) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年、469頁)では、「ノボリサシ(職差)」の意味について「戦争の時に、竹に付けた丈の高い旗〔職〕をかかげて行く者」としている。

(注4) 個人名でない点に注意したい。

(注5) この外また2挺、今は手負い。

(注6) 個人名でない点に注意したい。

(注7) 個人名でない点に注意したい。

(注8) この外また2挺、今は手負い。

(注9) 下記の【筆者(白峰)による合計結果】を見ると、B(主従)、H(外夫)、I(被官)、J(夫)の合計数値は874人である。よって、882人とは一致しない。また、兵617人<sup>(注10)</sup> + 鉄炮95挺<sup>(注11)</sup> + 弓49(半弓を加える)(張脱カ)<sup>(注12)</sup> + 鑓53本<sup>(注13)</sup> + のぼり15本<sup>(注14)</sup> = 829であるので、この場合も882人とは一致しない。

(注10) 下記の【筆者(白峰)による合計結果】を見ると、B(主従)、H(外夫)、I(被官)、J(夫)の合計数値である874人から、H(外夫)の208人とJ(夫)の65人を差し引くと601人になり、617人とは一致しない。よって、上表において、何をもって「兵」の人数としているのかは検討が必要である。

(注11) 下記の【筆者(白峰)による合計結果】を見ると、C(鉄炮)は90挺であり、下記のK(直鉄炮2挺)を加算しても92挺である。よって、95挺とは一致しない。

(注12) 下記の【筆者(白峰)による合計結果】を見ると、E(弓)とF(半弓)を合計すると49張である。よって、49(張脱カ)と一致する。

(注13) 下記の【筆者(白峰)による合計結果】を見ると、D(鑓)は52本である。よって、53本とは一致しない。

(注14) 下記の【筆者(白峰)による合計結果】を見ると、G(のぼり)は7本である。よって、15本とは一致しない。

#### 【筆者(白峰)による合計結果】

筆者(白峰)が上表における各項目の合計数値を実際に計算すると以下のようになった。

石役 10,970石役…A 主従 512人…B 鉄炮 90挺…C 鑓 52本…D 弓 29張…E 半弓 20張…F のぼり 7本…G

外夫 208人…H 被官 89人…I 夫 65人(上表の「その他」における、此夫+夫+夫の記載がない人数のみ=65人) …J

直鉄炮 2挺(上表の「その他」)…K 長刀 2振(上表の「その他」)…L のぼりさし 7人(上表の「その他」)…M

表5

後藤茂綱の家来が10月20日に分捕った人数<sup>(註1)</sup>

- A 立花三太夫（統次）…今泉軍助（が）討ち捕らえた
- （立花）三太夫が帯びた脇差と鎧透しを軍助の被官の末次四右衛門が取った。この刀と脇差は軍助の手に召し置いた。鎧透しは（軍助の被官の末次）四右衛門に取らせた。（刀は）大小共に金の張鞘<sup>はりきや</sup>であった。
- ▼被官と共に敵と戦っている点に注意すること。
  - ▼討ち取った敵の脇差などは（戦利品として）そのまま持ってきた点に注意すること。
- B 小野道可、ほかに1人…岡部與右衛門（が）討ち捕らえた
- 撤退する（敵の）軍勢の内から、（小野）道可が引き返して突き掛かったので、鎧を合わせて討ち取った。（小野）道可の鎧をも取り、また、一人が切り向かってきたので討ち取り、その場にて被官の岩谷三郎兵衛が（敵の）武者一人を討ち取った。右の（小野）道可の鎧を（岡部）與右衛門の子孫が所持している。
- ▼被官と共に敵と戦っている点に注意すること。
  - ▼刀ではなく鎧を合わせている点に注意すること。
  - ▼討ち取った敵の鎧を（戦利品として）討ち取った者の子孫が所持している点に注意すること。
- C 香丸内蔵助、ほかに2人…梶山杣之允が討ち捕らえた
- 香丸内蔵助（と敵が）名乗り、立ち会い切り詰めて切り伏せた。（敵の）首を搔<sup>か</sup>こうとしたが、切り合いの時に刀の刃がことごとくつぶれて切れないので、（敵の香丸）内蔵助の刀を取って（敵の）首を搔き落とした。（その首を）この方の先手の塚原與左衛門、馬場甚右衛門、岡部千右衛門に見せたが、今日の軍<sup>いくさ</sup>は討ち捨てなので、夕べ（＝昨晚）の御触れは聞いてないのか、と述べたため、そのことは知っているが、これは名のある（敵の）首なので「見スル」（見せた、という意味か？）である、と言って（その首を）投げ捨てて、敵陣に駆け入り、また2人を討ち取った。（梶山）杣之允も最前の切り合いで左の頬から腕にかけて3ヶ所の手負いをした。（敵の香丸）内蔵助の刀は（討ち取った梶山）杣之允の子孫が所持している。
- ▼白兵戦で刀で切り合ったシーンもあったことがわかる。
  - ▼白兵戦で刀で激しく切り合った場合、刀の刃がことごとくつぶれて切れなかったことがわかる。
  - ▼討ち取った敵の刀を（戦利品として）討ち取った者の子孫が所持している点に注意すること。
  - ▼10月20日の戦い（江上八院の戦い）は、鍋島家側では「討ち捨て」の触れを前日の晩に出していたことがわかる。
- D 討ち捕えたのは3人…寺木宗活
- （後藤）茂綱の側を駆け通ったので、（後藤茂綱が）しばらく待つように述べたが、（後藤茂綱の）鞍<sup>くら</sup>の前輪<sup>まえわ</sup>（＝鞍の前部）（のところで）来て平伏し、一陣（＝先陣）へ駆け入り、敵3人を討ち取った。（そして）その身も討死した。（寺木）宗活は旅人であったが（後藤茂綱に）懇切にされたので、かねてその恩に報い難いと思い、この度の一戦において討死して、せめて恩をむくいるべき、と幸いに思う旨を書き置きして、また、一通を懐中して戦死した。
- ▼後藤茂綱は先手ではなく二陣であったので、その配下の寺木宗活は単独で抜け駆けして先手に進んで敵と戦って戦死した、ということになる。

- E 討ち捕えたのは2人…中村勘兵衛（歳33）
- （中村）勘兵衛は昇物頭<sup>のぼり</sup>である。下知に任せて昇を差し入れ、敵2人を討ち捕らえた。被官の小助という者に（討ち取った敵の）首を持たせて遣わした。（そして）また（敵の）2人と渡り合い、ついに討たれた。（被官の）小助も（戦場に）立ち帰ったが、主人（の中村勘兵衛）が討たれたので、その身も討死した。
- ▼昇物頭<sup>のぼり</sup>の戦いでの役目は、昇を差し入れることであったことがわかる。
  - ▼中村勘兵衛は被官を連れて戦ったことがわかる。
  - ▼この場合、被官には名字がない。
  - ▼被官も戦って討死した。この場合、被官は戦っているので戦闘員である。
- F 討ち捕えた人数は不詳…牟田外助（歳32）
- 敵を数多討ち捕えて戦死した。
- G 討ち捕えたのは3人…牟田外助の弟・助九（歳19）
- 敵2人を討ち取る。兄の（牟田）外助のことを尋ねると討死したとのことなので、敵陣に駆け入り、また1人を討ち捕えて、その身も討たれた。
- H 討ち捕えたのは3人…堤孫九郎（歳25）
- （前出の中村）勘兵衛・（牟田）外助と同様に進み、敵2人を討ち取り、（討ち取った敵の）首を被官の市丸源右衛門という者に持たせて遣わした。また、（敵の）首1つを取り、（被官の市丸）源右衛門が（戦場に）立ち帰り、（主人の堤）孫九郎を尋ねたが、1町（＝約109m）ばかり脇に鎧を押し立て、片手に首1つを提げ、<sup>き</sup>「ムクロ」（＝死体）に腰し掛け、手負いであった。（被官の市丸）源右衛門が立ち寄って見ると、高股<sup>たかもも</sup>（の部分に）、鎧の手負いがあり、ことのほか疲れていた（被官の市丸）源右衛門が肩に掛けて、1町（＝約109m）ばかり立ち退いたが、（主人の堤）孫九郎はそのまま果てた（＝死去した）。
- ▼この場合、被官には名字がある。
  - ▼この場合、被官は戦っていないので戦闘員ではない。
  - ▼戦場で被官が主人を助けた状況がよくわかる。
- I 討ち捕えたのは3人…山伏の火乱坊
- さきほど討った首は、後藤家で一番首とのことである。
- ▼「一番首」は評価されたことがわかる。
  - ▼山伏も戦闘に参加したことがわかる。
- J 討ち捕えたのは1人…板屋六左衛門
- （敵と）立ち会い切り結んだが、勝負が決まらず、組み打ちをして敵を組み敷き、首を取った。
- ▼組み打ちをして、敵を組み敷き、首を取ったケースがあったことがわかる。

- K 討ち捕えたのは2人…江嶋新右衛門
- 敵と立ち会い、しばらく勝負が決しなかった。被官の古賀小太郎は16歳になる者であったが、(この被官の古賀小太郎が) 両馬の間に駆け入り、切り掛けたところを敵が(被官の古賀小太郎を) 切り殺した。(江嶋) 新右衛門は激しく戦い、ついにこれを討ち取った。刀の刃は鋸のようになったので、(後藤) 茂綱は刀を遣わした。
- ▼この場合、被官には名字がある。
  - ▼この場合、被官は戦っているので戦闘員である。
  - ▼この場合、被官は16歳であったが戦って討死した。
  - ▼「両馬の間に駆け入り」ということは、江嶋新右衛門も敵も馬に乗って戦っていたことがわかる
  - ▼この場合、「刀の刃は鋸のようになった」としているので、刀で敵と切り合ったことがわかる。
  - ▼敵と刀で激しく切り合った場合は「刀の刃は鋸のようになった」ことがわかる。
- L 討ち捕えたのは1人…成松左平太
- 切り合いのなかばに成松九郎兵衛がかけつけて(敵を) 切り、(成松) 左平太が首を取った。
- M 討ち捕えたのは2人…古賀長右衛門
- 敵1人を討ち取り、立ち上がったところ、また(敵が馬で) 馳せて来たので、(この敵と) 切り結び、(古賀) 長右衛門は深手を負った。危なく見えた時、(古賀長右衛門の) 被官が駆け込んで(敵を) 討ち取った。(しかし、古賀) 長右衛門は5日目に果てた(=死んだ)
- ▼この場合、被官の名前は記されていない。
  - ▼この場合、被官は戦っているので戦闘員である。
  - ▼この場合、被官が主人の危機を見て、戦いの応援に来たことがわかる。このことから被官の戦いでの役割がわかる。
- N 討ち捕えたのは1人…原田采女
- 敵を追いかけて堀際まで来た時、(敵の) 両人が引き返し戦った。(敵の) 1人を(鎧で) 突き伏せたので、もう1人は堀に飛び入り、(原田) 采女は続けて堀に降り立ち、打ち合っていたところ、(さらに) 敵数人が馳せて来て、(原田采女の) 手をしきりにたたいたので、(手の) 甲も切り破れ危なかったが、(原田采女の) 被官の大河内加右衛門という者がかけつけて防いだので、敵は堀を越えて逃げ去った。この時、敵は手鎧(=柄が細く短めの鎧)を投げて突き刺したので(鎧が原田采女の被官の大河内) 加右衛門の股を突き貫いた。
- ▼この場合、被官には名字がある。
  - ▼この場合、被官は戦っているので戦闘員である。
  - ▼この場合、被官が主人の危機を見て、戦いの応援に来たことがわかる。このことから被官の戦いでの役割がわかる。
  - ▼江上八院の戦いでは、堀際、及び、堀の中で戦いがあったことがわかる。
  - ▼戦いの際には、敵に対して手鎧を投げて突き刺したケースもあったことがわかる。

- O 討ち捕えたのは1人…黒髪弥六兵衛
- 敵5～6人がいたところへ切りかかったので、（敵の）3～4人は逃げ散り、（その）主人は手負いをしたと見え、馬に乗せたところを切り落としたので、その家来共が切り掛かってきたのを追い散らし（主人の）首を取ったところ、脇から鉄炮にて<sup>えびら</sup>籠付を打たれて危なかった時に、被官の惣右衛門がかけつけたので（敵は）負けて退いた。
- ▼この場合、被官には名字がない。
  - ▼この場合、被官が主人の危機を見て、戦いの応援に来たことがわかる。このことから被官の戦いでの役割がわかる。
  - ▼この場合、鎧ではなく、刀を使用しているように思われる。
  - ▼この場合、敵の立花家の軍勢は鉄炮を使用していることがわかる。
- P 討ち捕えたのは1人…久井勝左衛門
- 太刀にて（敵を）討ち取り、（久井）勝左衛門も右膝に手疵を負った。
- ▼この場合、太刀を使用して敵を討ち取ったことがわかる。
- Q 討ち捕えたのは1人…木嶋彌助
- 敵から組み敷かれて、下から鎧透しをもって突きはね返し、（敵の）首を取った。（木嶋）彌助は歳は16であった。
- ▼戦いでは組み敷かれるケースもあったことがわかる。
  - ▼16歳でも首取りをしたことがわかる。
- R 討ち捕えたのは2人…堤惣右衛門
- （敵の）1人は太刀にて討ち取り、（敵のもう）1人は堀に落ちて入ったのを鎧にて突いて（敵の）首を取った。
- ▼この場合、太刀と鎧を一人の者が使用していることがわかる（つまり、太刀と鎧を一人の者が両方持っていたことになる）。堀に落ちた敵に対しては鎧を使用したので、敵との距離がある場合は、太刀ではなく鎧を使用したことがわかる。つまり、戦いのシーンによって、同一人物でも適宜、太刀と鎧を使い分けたことがわかる。
  - ▼江上八院の戦いでは、堀際で戦いがあったことがわかる。
- S （以下は）1人ずつを（それぞれが）討ち捕えた。討ち捕えた状況は（上記のように）わからない。
- 塚原與左衛門  
 古賀平兵衛  
 小野越中  
 閨孫右衛門  
 都知木刑（形）右衛門 …… 数度、敵合し18ヶ所手負い  
 力安彦助  
 樋口源兵衛  
 山下市右衛門

埋江次郎左衛門 野口八郎兵衛 北川織部 橋口平次兵衛 浦川千吉 歳 <del>19</del> 岩谷三郎兵衛 …… 太刀にて討ち取り鎧をも取る
手負の人数 <sup>(注2)</sup>
富岡惣右衛門 吉武彌太右衛門 樋口軍右衛門 大河内加右衛門

(注1) 「後藤茂綱家来十月廿日分捕人数」(「後藤戦功記」、『佐賀県近世史料』1編1巻、佐賀県立図書館、1993年、808～811頁)。後藤茂綱は鍋島家軍勢の編成では二陣である(表2、図1参照)。

(注2) 1人ずつをそれぞれが討ち捕えたが手負いをした者、という意味であろう。

※上表において、筆者(白峰)の各コメントは▼印を付けて記した。

※上表におけるA～Sのアルファベットは、作表にあたり補足した。



表6

『佐賀藩諸家差出戦功書』<sup>(註1)</sup>における江上八院の戦い関係の記載

①	<p>中嶋義實（将監）（8頁）</p> <p>慶長5年10月20日、柳川八ノ院において、三番を（にカ）<sup>(マ)</sup> 鑓を合わせて、立花統次（三太夫）の先武者8人を分捕った（＝首を取った）。その時、深手を被った。この証人は赤司左京である。この柳川における軍功について（鍋島）直茂様、勝茂様がお聞きになり、以後、忘却しない旨を鍋島茂忠（七左衛門）殿より仰せ渡され、感状に添えて具足と甲<sup>かぶと</sup>を拝領した。そのうえ、（肥前国）杵島郡内の大町において知行の加増を命じられて300石の辻に成された。</p> <p>▼鍋島茂忠（七左衛門）を通して感状をもらったということは、中嶋義實は鍋島茂忠（七左衛門）の組に属していたと考えられる。この場合の首取りには証人がいたことがわかる。</p> <p>▼この感状は326頁の「（慶長六年）十二月六日付堤八兵衛宛鍋島義（茂カ）<sup>(マ)</sup> 忠感状写」と同文（同日付）のものと思われる。</p> <p>▼戦場として、「柳川八ノ院」の地名がわかる点は重要である。</p> <p>▼「先武者」とは「前衛になって行く武士」（土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』、岩波書店、1980年、558頁）という意味である。</p>
②	<p>馬渡三右衛門（60頁）</p> <p>慶長5年10月20日、柳川御一戦の時、先祖の馬渡三右衛門は鍋島茂忠（七左衛門）の組付であり、その時、与<sup>くみ</sup>の者20人を付けられて、柳川において一番に（敵と）鑓を合わせる勲功であったので、帰陣した時、（鍋島）直茂様より御褒美として知行15石の加増を命じられた。この知行は（馬渡）三右衛門の二男の権右衛門へ拝領したい旨を願い、その通りに命じられ、ありがたく思った。その時、（鍋島）勝茂様より御書を頂戴した。</p> <p>▼戦いにおいて一番鑓は勲功であったことがわかる。</p>
③	<p>小川直房（半七）（66～67頁）</p> <p>実は（鍋島）直茂公の御次男である。慶長5年10月、柳川御陣の時、（鍋島）勝茂公に御供した。慶長9年、本姓に返り、鍋島忠茂（和泉守）に改めた。これにより、小川の名跡は断絶した。</p> <p>▼鍋島勝茂の御供であった小川直房には、柳川御陣（江上八院の戦い）の時の戦鬪の記載がないので、鍋島勝茂の在陣場所では戦鬪がなかったことがわかる。</p>
④	<p>久納市右衛門（72頁）</p> <p>（鍋島）勝茂が筑後において柳川の城を攻めた時、御（軍）勢の内に久納市右衛門がいて働いた旨を承伝している。</p>
⑤	<p>高木千兵衛（82頁）</p> <p>柳川御陣の時、戦功があったため、御加米10石の拝領を命じられた。（中略）その時は鍋島茂忠（安芸）の組にいた。</p> <p>▼江上八院の戦いの際、高木千兵衛は鍋島茂忠の組に所属していたことがわかる。鍋島茂忠は先手（前方）であったので、高木千兵衛は先手として戦い、戦功があったことがわかる。</p>

- ⑥ 上野讃岐、上野善兵衛（86頁）  
柳川御陣の時、上野讃岐と叔父の上野善兵衛が御供をした。上野讃岐は御馬役であったので小荷駄300疋を率いて行った。御一戦の時、(敵の)首2つを取り、手負いをして死去した。上野善兵衛は(敵の)首2つを討ち取った。この証人は相浦五郎右衛門・石井弥六兵衛とのことである。  
▼小荷駄300疋というように、小荷駄の規模がわかる点は重要である。小荷駄を率いた馬役(上野讃岐)であっても、戦いに参加して敵の首2つを取ったことがわかる。上野善兵衛の首取りには証人が2人いたことがわかる。
- ⑦ 石井七右衛門（103頁）  
柳川御成敗の時、石井七右衛門は御先手に働き、(敵の)六具武者5人を討ち捕らえ、3人に手負いをさせて、戦死した。  
▼石井七右衛門は御先手として働いた、としているので、先手において戦闘に参加したことがわかる。
- ⑧ 松田源右衛門（147頁）  
柳川(の合戦)においても敵2人を討ち取った。その首帳が今も残っている。  
▼その首帳とは、表1の頸帳(頸帳A)を指すと考えられ、松田源右衛門(頸数2)の名前が記されている。
- ⑨ 水町定成(孫左衛門)(156頁)  
慶長5年10月、柳川御出陣の時、(鍋島)直茂公、勝茂公が榎木津(現福岡県大川市榎津)へ来るということ承り、数代にわたり御厚恩を蒙っていたので、水町定成は病身であったが、気を励まして子供や一族等を集めて、50余人で大舟に乗り、鉄炮数十丁と多くの武具を(大舟に)乗せ、榎(木)津辺りに舟を寄せて、(鍋島直茂、勝茂の)渡海(渡河カ)を待っていたが、急に(鍋島直茂、勝茂は)住吉(の渡し)を渡河したので、その御供はできなかった。しかし、柳川(=立花家方)の船手の守衛である立花成家(吉左衛門)以下は小勢(=少ない人数)である様子に見えたので、夜中に榎(木)津に上り、所々の警衛を追い払って、10月17日の夜半に(鍋島)直茂公の御陣に馳せ着いた。そして、成富十右衛門(茂安)をもってこのことを言上した。(鍋島)直茂公はこのことを聞いて、神妙の旨の上意を蒙り、御帰陣のうえ、銀子を拝領した。  
▼水町定成が子供や一族等を集めて、50余人で大舟に乗り、鉄炮数十丁と多くの武具を(大舟に)乗せた、という状況からは、当時の小領主(鍋島家家臣)の出陣の状況が具体的によくわかる。
- ⑩ 池尻家資(右馬佐)(169頁)  
柳川御陣の時、池尻家資は親子共に御供をした。(肥前国)三根郡矢俣(現佐賀県三養基郡みやき町)へ住居して在在所であるので、案内等の心得があり、(鍋島直茂、勝茂の)住吉渡海(渡河カ)のほか万端のことについて働いた。この時、召し使っていた森土佐という者が、住吉の御渡場の瀬踏み(=川を渡るときに、足を踏み入れるなどして、あらかじめ水の深さを測ること<sup>(註2)</sup>)をして(鍋島家の)御総勢を渡した。そのため、御褒美として、この時より32石の点役<sup>(註3)</sup>を免じられて、永々この所の渡守<sup>わたしもり</sup>に命じられた。この子孫がただ今まで渡守を勤めている。  
▼鍋島家の御総勢が渡河した時の状況がよくわかる。

- ⑪ 池尻玄蕃（源十郎、池尻家資の子）（171頁）  
 柳川御陣の時、（鍋島）勝茂様の御供立として大坂から（国許に）着いて、池尻家資と玄蕃の親子共に御供をした。  
 ▼鍋島勝茂の御供であった池尻家資と玄蕃の親子は、柳川御陣（江上八院の戦い）の時の戦闘の記載がないので、鍋島勝茂の在陣場所では戦闘がなかったことがわかる。
- ⑫ 池尻玄蕃（池尻家資の子）（179頁）  
 柳川御陣の時分も、池尻玄蕃は上方から鍋島勝茂の御供立として（国許に）下った。鍋島茂里が先手を命じられ、住吉御渡海（渡河カ）の時も（その場所は）在所であったので、（父の）池尻家資の働きは形の如くであった。その時分、（父の）池尻家資の家来の森土佐などという者も御褒美を命じられた。始終のことについて、池尻家資父子の粉骨について深々と（鍋島直茂、勝茂が）御感悦されたことは紛れがなかった。
- ⑬ 原清右衛門（213頁）  
 柳川御陣に出陣したが、敵合（＝敵と対戦する、という意味と考えられる）に及ばなかった。  
 ▼原清右衛門は敵と対戦しなかったということは、原清右衛門は敵と対戦した先手ではなく、後方に位置していたと考えられる。
- ⑭ 綾部玄蕃（215頁）  
 柳川御陣の時、綾部玄蕃も足軽物頭として御供した。  
 ▼戦いの時に足軽物頭という役割があったことがわかる。
- ⑮ 馬渡亦兵衛（234～237頁）  
 「柳川陣頸帳」→表1参照（頸帳A）  
 ▼ただし、この頸帳（頸帳A）がどうして馬渡氏の戦功書の中に含まれているのか理由は不明である。ちなみに、この頸帳の中に馬渡氏の名前はないが、江上八院の戦いで馬渡三右衛門は鍋島茂忠（先手〔前方〕）の組付として敵と戦い一番鐘の戦功があった（表6の②参照）。よって、馬渡三右衛門が鍋島茂忠に属して戦ったことと関係するのかも知れない。
- ⑯ 三上茂勝（新助）（238頁）  
 柳川御陣の時、鍋島勝茂の御供を命じられ、その時、龍造寺の名字を改め、御一字を拝領して茂勝と名乗った。  
 ▼鍋島勝茂の御供であった三上茂勝には、柳川御陣（江上八院の戦い）の時の戦闘の記載がないので、鍋島勝茂の在陣場所では戦闘がなかったことがわかる。  
 ▼三上茂勝が、龍造寺の名字を改めて、鍋島勝茂から一字を拝領して茂勝と名乗ったことは、この時点（慶長5年10月）での龍造寺氏から鍋島氏への権力委譲を示す徴証と見ることができのかどうか検討する必要がある。

- ⑰ 鍋嶋種巻（新左衛門）（254～255頁）  
柳川御陣、「さしき」（＝佐敷のことか？）御陣の時も、鍋嶋種巻とその嫡子である鍋嶋茂忠（九郎兵衛）は供をして、その時も（敵の）分捕り（＝首取り）をした。
- ⑱ 高木泰幸（権兵衛）（259頁）  
高木泰幸は鍋島茂里（平五郎）の組内で御供をしたが、関ヶ原・柳川・大坂両度の御出陣では国許に召し置かれて御城普請など諸事の御政務を命じられた。  
▼高木泰幸は鍋島茂里の組内であったことがわかる。
- ⑲ 高木泰信（長左衛門）（259頁）  
柳川御陣と有馬原城御出陣（＝島原の乱）の時、高木泰幸は鍋島茂里（平五郎）の組内にて御供をした。  
▼江上八院の戦いの時、高木泰信は鍋島茂里（先手〔後方〕）の組内であったことがわかる。戦いは異なっているが、鍋島茂里組の所属は変更がなかったことがわかる。
- ⑳ 三浦彦右衛門（264頁）  
筑後柳川御陣に出陣して、被官の孫左衛門という者が、その地である八野江（八之院カ）・牟田という所にて討死した。その場で三浦彦右衛門は、その敵を討ち、その者が持っていた鎧を討ち取った。三浦彦右衛門は、別条なく帰陣して、その鎧は所持している。  
▼この場合、被官には名字がなく孫左衛門という名前のみであったことがわかる。この場合、被官は戦っているため戦鬪員である。三浦彦右衛門は被官と共に戦ったことがわかる。  
▼戦場として、「八野江（八之院カ）」と「牟田」の地名がわかる点は重要である。「牟田」は、現福岡県三潁郡大木町八町牟田に比定できる。  
▼戦利品として敵の鎧を持ち帰って、その後も所持していたことがわかる。
- ㉑ 古賀景吉（正兵衛）（283頁）  
慶長5年、（鍋島）勝茂様が立花御征伐の台命を蒙り、柳河へ御発向の時、鍋島淡路<sup>(註4)</sup>（鍋島茂里カ）の組内であった古賀景吉は、手組を召し連れて御供をして働いた。  
▼古賀景吉が手組を召し連れて参戦したことは、鍋島家家臣が、さらにその配下として手組を引き連れていたことがわかる。
- ㉒ 中野吉兵衛（302頁）  
柳川御陣の時、御供をした。
- ㉓ 山領主馬佑（312頁）  
慶長5年、柳川御陣の時は、日峯様（鍋島直茂）より御懇ろの御意にて、御留守のことを命じられて御供はしなかった。  
▼江上八院の戦いの時、国許の留守を守った家臣もいたことがわかる。

②4 山領善兵衛（312頁）  
慶長5年、柳川御発向の時も御供をした。

②5 藤山四右衛門（317頁）  
（鍋島）勝茂様が柳川御陣の時、八院において数ヶ所疵を被り働いたので、御帰陣のうで御褒美として御加米10石を拝領した。  
▼戦場として、「八院」の地名がわかる点は重要である。

②6 堤雅楽（323頁）  
堤雅楽は鍋島茂里（主水）組の鉄砲頭であり、柳川御陣の時、御供した。  
▼江上八院の戦いの時、堤雅楽は鍋島茂里組（先手〔後方〕）の鉄砲頭として出陣したことがわかる。

②7 堤八兵衛（323頁）  
柳川御陣の時、堤八兵衛は親（堤雅楽）掛りではあったが、鍋島茂忠（安芸）組に召されて、昇足軽を預けられて御供して行き、刀疵を被り、似合いの働きをしたので、御目録をもって米15石を拝領した。鍋島茂忠からも感状をもって具足一領を褒美として遣わされた。この御目録と感状は今も所持している。  
▼この感状写は326頁に提示されている。  
▼昇足軽とは、昇を持つ足軽という意味であろう。  
▼刀疵を被ったということは、先手（前方）の鍋島茂忠組では戦闘があったことがわかる。

②8 堤八兵衛（325～326頁）  
柳川御陣の時、鍋島茂忠（安芸）より堤八兵衛へ出した感状の写。

於去年筑後表、立花御成敗之砌、被抽分骨之通、至 加蒞父子江遂披露候、以来不可在御忘却之由候、先以為形具足甲進之候、補志迄候、仍状如件、

十二月六日 (マツ) 義（茂カ）忠 判

堤 八兵衛殿  
参

▼この感状は、内容的には「（慶長六年）十二月六日付宮永源右衛門宛鍋島茂忠感状写」<sup>(註5)</sup>、「慶長六年十二月六日付鍋嶋十介宛鍋島茂忠感状写」<sup>(註6)</sup>とほぼ同文であり、同日付である。なお、この感状が、江上八院の戦いから1年以上経過してから出されていること理由はよくわからない。

▼堤八兵衛は鍋島茂忠（安芸）組であったので、鍋島茂忠から感状が出たのであろう。つまり、この感状は、鍋島茂忠が自分の組の者に対して出したものであり、自分の家臣に対して出したものではなかった点には注意する必要がある（堤八兵衛は鍋島茂忠の組の者であって、鍋島茂忠の家臣ではない）。よって、前掲「（慶長六年）十二月六日付宮永源右衛門宛鍋島茂忠感状写」、前掲「慶長六年十二月六日付鍋嶋十介宛鍋島茂忠感状写」の宛所である宮永源右衛門と鍋嶋十介も鍋島茂忠

の組の者ではあったが、鍋島茂忠の家臣ではなかったことになる。この点について、拙稿「関ヶ原の戦い関係の一次史料についての検討（その1）－鍋島家関係文書を中心に－」<sup>(注7)</sup>では、宮永源右衛門を「鍋島茂忠(茂賢)の家臣」としたが、「鍋島茂忠(茂賢)の組の者」と訂正する。

▼鍋島茂忠は、江上八院の戦いの時の先手（前方）であったので、先手が展開したエリアでは戦闘があったことがわかる。

②9 上野善兵衛（334頁）

柳川御陣の時、上野善兵衛は火の手を上げ、そのうえ、分捕りをして（敵の）首2つを討ち取った。このことは相浦五郎右衛門と石井弥六兵衛が知っている（＝証人という意味）ということを兩人から申し出た。

▼上野善兵衛については86頁にも出てくる（表6の⑥参照）。ただし、文言は若干異なる箇所もある。

▼「火の手を上げ」という記載は86頁にはない。「火の手を上げ」というのは放火したという意味であろうか。

③0 上野讃岐（334頁）

柳川御陣の時も、上野讃岐は御馬役であったので（小荷駄）30疋を引かせて、柳川<sup>(マ)</sup>八之江<sup>(マ)</sup>（八之院カ）の御一戦の時、6番目に（敵の）首2つを討ち取り、その時、手負いをして帰ってきて死した。

▼上野讃岐については86頁にも出てくる（表6の⑥参照）。ただし、文言は若干異なる箇所もある。

▼「6番目に」という記載は86頁にはない。

▼「6番目に（敵の）首2つ」を討ち取った、ということは、一番首から数えて六番目という意味か。

▼戦場として、「柳川<sup>(マ)</sup>八之江<sup>(マ)</sup>（八之院カ）」の地名がわかる点は重要である。

③1 石田為元（五郎左衛門）（342頁）

慶長5年、柳川の役では昇組15人を召し連れて働き、敵一人を討ち、御帰陣の後、鉄炮組35人を付けられて石井茂清（縫殿）組に召された。

▼江上八院の戦いの時に昇組<sup>のぼりぐみ</sup>が出陣したことがわかる。昇組とは戦いにおいて昇を持つ役目の組という意味であろう。

（注1）『佐賀藩諸家差出戦功書』（『佐賀県史料集成』古文書編、29巻、佐賀県立図書館、1988年）。

（注2）『大辞泉（第二版）』下巻（小学館、2012年、2053頁）。

（注3）「点役（てんやく）」とは「中世において臨時に課せられた雑役（雑税）」（『国史大辞典』9巻、吉川弘文館、1988年、1036頁）である。

（注4）鍋島淡路とは鍋島茂宗（淡路守）のことを指すが、この場合、鍋島茂宗の父である鍋島茂里（平五郎、主水）の誤記と考えられる。鍋島茂里は文禄の役と江上八院の戦いでは鍋島家軍勢の先手を務めた。

（注5）「（慶長六年）十二月六日付宮永源右衛門宛鍋島茂忠感状写」（『佐賀県史料集成』古文書編、26巻、佐賀県立図書館、1985年、278頁）。

（注6） 「慶長六年十二月六日付鍋嶋十介宛鍋島茂忠感状写」（前掲『佐賀県史料集成』古文書編、26巻、279頁）。

（注7） 拙稿「関ヶ原の戦い関係の一次史料についての検討（その1）－鍋島家関係文書を中心に－」（『愛城研報告』22号、愛知中世城郭研究会、2018年）。

※上表において、筆者（白峰）の各コメントは▼印を付けて記した。

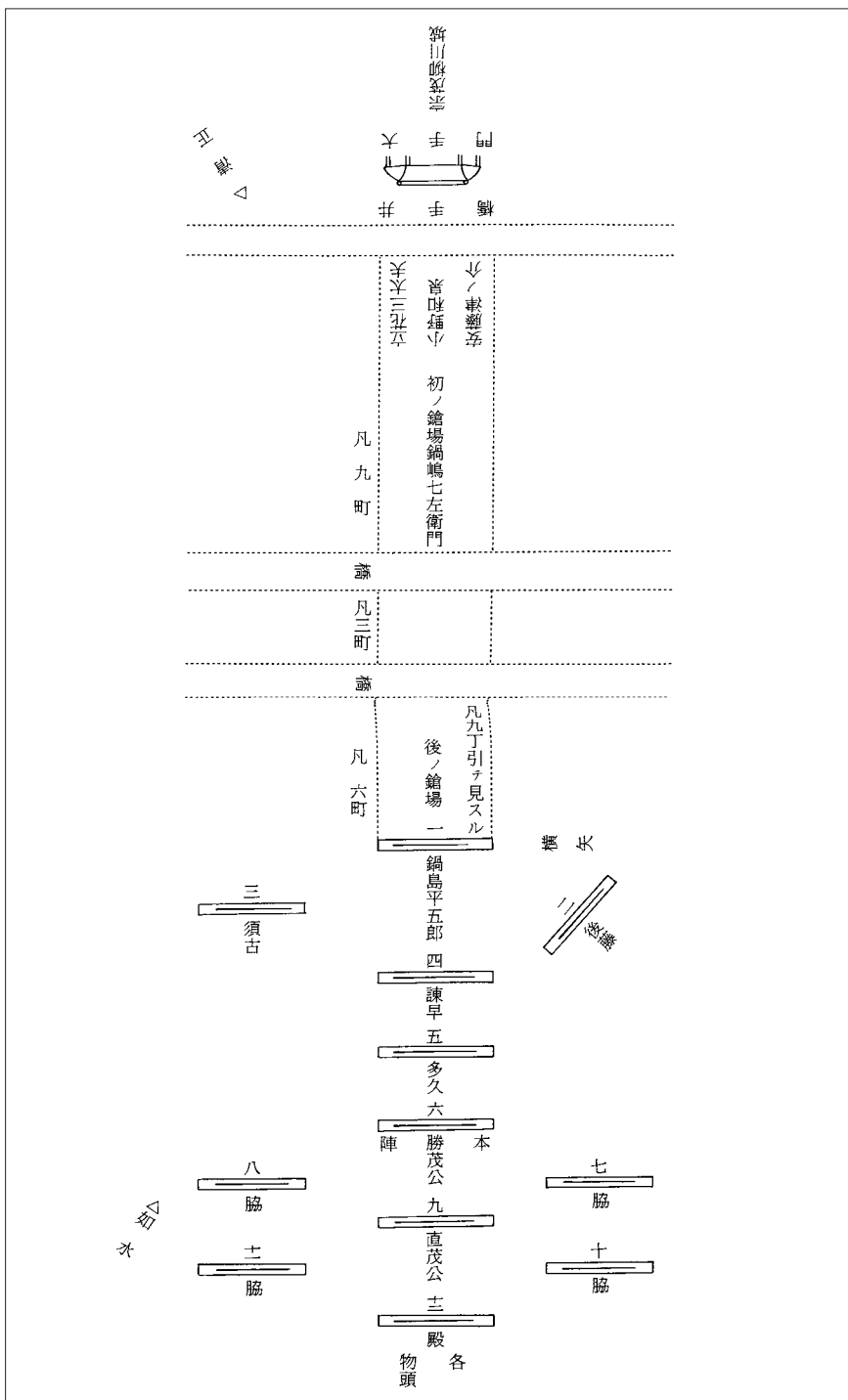
※上表における①～⑩の数字は、作表にあたり補足した。

※江上八院の戦い（慶長5年〔1600〕10月20日）については、『佐賀藩諸家差出戦功書』では、「柳川御陣」という表記で統一されている。ただし、一部には「柳川御一戦」、「柳川御出陣」、「柳川御発向」、「柳川之役」、「柳川御成敗」という表記もされている。

※沖田畷の戦い（天正12年〔1584〕）については、『佐賀藩諸家差出戦功書』では、「嶋原御合戦」、「嶋原御出馬」などと表記されている。

※島原の乱（寛永14年〔1637〕～同15年〔1638〕）については、『佐賀藩諸家差出戦功書』では、「有馬御陣」、「有馬之役」、「有馬原一揆」などと表記されている。

図1  
江上八院の戦いにおける鍋島家軍勢の布陣図



※上図は、『佐賀県近世史料』1編1巻（佐賀県立図書館、1993年、798～799頁）より引用した。